

絵画を読むことの難しさを思い知らされる。一遍研究会の、その特質・利点を生かしたさらなる活発な活動に、大きな期待が寄せられる。
(斉藤研一)

中国東北地区日中関係史研究会編

鈴木静夫・高田祥平編訳 鹿毛加寿子・白根理恵・鈴木 光・飛田立史訳

『中国人の見た中国・日本関係史』

——唐代から現代まで——

東方出版 一九九二・一二刊
B6 四五〇頁 三八〇〇円

近十年間、日中両国における近代日中関係史研究は特に活発である。無論、八〇年代以前の研究も決して少なくないのであるが、一九八〇年十月に大連で東北地区中日関係史学会が発足して以降、特に目ざましい成果が収められてきている。本書の編者でもある東北地区中日関係史学会は、発足後も盛んに活動を続けており、現在は、五百人の会員を擁する中国で最大の日中関係史学会であるという。同研究会発行の『中

日関係史論集』も輯を重ねており、加えて九二年には『中日関係大辞典』が出版された。

本書は、その東北地区日中関係史学会発足の際に提出された論文の一部を纏めた『中日関係史論叢』の翻訳本である。本書の翻訳出版の経緯については、「日本人とアジア人相互理解のギャップを追求する上」で、「中国人学者の日本観」を示す本書が注目されたと、編訳者である鈴木静夫・静岡県大教授が記している。

この論文集は、分析視角が政府よりであるという点や、論文としての体裁をなしていないものが中にはあるという点で、研究内容面で、現在の日本の日中関係史研究者に資するところが少ないかもしれないが、日中関係史の研究動向をある意味で決定づけた、正に記念碑的存在である本書を、原点に立ち戻る意味で、再回顧することは意味のあることだろう。加えて、「中国人の日本観」という視点で、現代中国の日中関係史学者達が、テーマとして選択する内容を捉え直してみることも必要な作業であると考えられないであろうか。

掲載されている論文は全部で二五本。

『中日関係史論集・第六輯』に掲載されていた関捷氏の論文以外は、前述の様に八〇年の論文である。時代的には、唐代が三本、明代が三本、そして、残りの一八本が近現代である。内容面については、三国干渉を扱った論文等の政治外交面、北洋艦隊の問題点を指摘する論文等の軍事面、清代前期の中日棹銅貿易を扱った論文等の経済面、そして章太炎と中日文化交流を扱った論文等の文化交流面と幅広い。分析視角も、これまで支配的であった「文化は高きから低きに流れる」という見方や「友好・非友好」という側面だけに囚われることなく、中には純粹に学問的視点から追求しようとする方向も見られる論文もある。

翻訳は非常に分かりやすく、原論文に見られた誤植や引用ミスを補っており、作業の辛苦を窺わせる。

また、巻末に付された関捷氏の日中関係史に関する「回顧と展望」や『中日関係史論集』全目次は、これまでの研究動向や今後の方向付けに役立つものと思われる。そして、「あとがき」の中で東南アジア研究

者である編訳者は、日中関係史研究者に対し、示唆に富んだ提言をしている。編訳者は、中国における日本研究が一次史料利用の面で障害があるので、日中間で資料を共有するべきであると述べ、その後でこう述べている。「東南アジアでは、現地に対する還元のない研究は、資料と情報の一方的搾取とみなされて、評判が悪い。研究者の数が中国に比べれば少ない東南アジアですら、研究の目的と方法が問われている。まして日中間の特殊事情を考える時、この資料の共有問題は早晩解決を迫られることになる様に思われる。」(川島 真)

桜井万里子著

『古代ギリシアの女たち』

——アテナイの現実と夢——

(中公新書 1109)

中央公論社 一九九二・一二刊
B 40 二三七頁 七二〇円

本書は、我が国における古代ギリシア女性史研究の第一人者である著者による、ア

テナイの女たちの実相に迫ろうとする試みであり、一九七〇年代後半以降に輩出した、フェミニズムの視点からの欧米の研究成果を活用した一冊である。広い読者層が念頭に置かれているが、アテナイの女性の地位や権利、祭儀への参加等についてのこれまでの著者の業績に裏打ちされており、専門書としても十分読みごたえのあるものになっている。以前著者は、欧米における古代ギリシア女性史の研究動向を整理して紹介した際(『古代ギリシア女性史研究』『歴史学研究』五五二、一九八六)、「女性の生活、女性に認められていた諸権利、女性の社会的地位、女性抑圧の実態、男女関係のありよう、これらすべてを包摂し、文化を含む全社会システムを対象を拡大して、女性が『女性』としての生を送ることになったその操作(からくり)の構造を明らかにすること」を、今後の女性史の課題として展望した。こうした認識は、本書を通じて繰り返し述べられている基本的視角であり、著者のこの一貫した研究姿勢こそが、本書の最大のメリットと言えるであろう。

内容に移ろう。まずプロローグにおいて

著者は、女たちが書き残した史料はほとんど皆無であるという史料制約を確認しながら、史料の中の「女たち」をアテナイ社会の構造の中に有機的に位置づけるため、アテナイ社会が今日に残してくれた全てを検討対象とすることを明示している。続いて、アテナイに生活する女たちの身分の分類がなされ(一章)、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一章は市民身分の女性(アステ)の実態の探究にあてられている。アテナイの女性が考察対象とされているが、スパルタやクレタの女性との比較もところどころ折り込まれながら、彼女たちの生きざまが析出されている。まず、女性市民たちの少女期の生活(二章)と、当時の社会通念における女性像(三章)が扱われ、四、五、六章においては、結婚と離婚のあり方が取り上げられている。史料から丹念に検証された結婚の手続きや離婚の際の財産権利、姦通法についての実情は、当時の社会において男性本位の道徳が通用していたことを如実に物語る。次いで、オイクスの管理を中心とする妻たちの生活が、史料に即して様々な角度から描き出され(七章)、女たちの唯一の公的活動である宗教